

成田山と市川宗家との繋がり

歌舞伎の市川宗家と成田山との関係は、江戸元禄時代（1688 年～1704 年）の初代市川團十郎(1660-1704)にまでさかのぼる。市川一門は今日までその繋がりを守り、祝日や人生の大きな記念行事ごとに寺を訪れている。

初代團十郎と屋号「成田屋」について

有名な歌舞伎役者である初代市川團十郎の父は、現在の成田市幡谷に生まれた。

市川一門の初代團十郎は、1673 年、14 歳で初舞台を踏む。侍の坂田公時に扮し、赤と黒に顔を塗り、大胆な演技を披露したのである。役者としてすぐに人気者になるが、私生活では子宝に恵まれずにいた。そこで成田山新勝寺へ行って祈願したところ、その後すぐに願いが叶い、1688 年男子を授かったのである。

初代團十郎は、この奇跡を大変喜び、1695 年、成田山新勝寺の不動明王を演じてこれを祝った。今までに類を見ないような芝居であり、これは大成功を収める。彼はこの後も度々不動明王を演じたという。こうしてこの役が市川家の十八番(favorite)となり、それ以来人気のレパートリーとして演じ続けられている。また、これが屋号、成田屋の始まりだともいわれている。

初代團十郎による、荒事といわれる勇壮なドラマは、見る人に今までの舞台になかった喜びと勇気を与えたと言われている。多くの観客にとって、その独特な赤と黒のメイク(隈取り)と、團十郎の荒事の演技は、まさに不動明王の化身のようにも思えた。演技のクライマックスに演じられる「見得(俳優が観客を強く見つめる瞬間 不動見得とも知られる)」は、観客の病気を治したとすら言われる。

初代團十郎の息子である九蔵は 10 歳で初舞台を踏んだ。親子は、子宝に恵まれたことや、歌舞伎「兵根元曾我」が大当たりしたことに感謝し、成田山新勝寺に大きな鏡を奉納した。また、舞台衣装

には成田山の葉牡丹紋をあしらうなど、その絆の深さを物語っている。その後何年も経ち、五代目が得意とする演目「暫く」にて、先祖の初代團十郎の信心を引き合いに出し、「成田の不動明王は先祖代々の産神にて…」とのセリフを言ったともいわれている。

このように、成田山新勝寺の不動明王は、市川一門の歌舞伎役者のルーツでもある。もしかしたら、「成田屋」の屋号を与えられるほどの信仰心があったからこそ、初代團十郎はあれほどの演技を行うことができたのかもしれない。。

表参道にある延命院旧跡